ぼくは盲導犬チャンピイ

河相　洌

偕成社文庫 4050

著者　河相 洌（かあい きよし）

1927年カナダのバンクーバー市に生まれる。1945年慶応義塾大学予科に入学するが，二年後失明のために中退。1952年同大学に復学，1956年文学部哲学科卒業。滋賀県立盲学校教諭を経て，1960年静岡県立浜松盲学校に転任，現在に至る。

住所／静岡県引佐郡細江町気賀1082-4

偕成社文庫　4050　　中学以上向

ぼくは盲導犬（もうどうけん）チャンピイ

1981年8月　初版第1刷

NDC 913 299P 18 cm

著者　河相洌

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3-5

発行者　今村廣

東京都板橋区栄町23-4

印刷所　新興印刷製本株式会社

発行所　株式会社　偕成社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3-5

振替・東京5-1352番　〒162

© Kiyoshi KAAI, 1981 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取替いたします

ISBN4-03-850500-6

ぼくは盲導犬チャンピイ

河相　洌

偕成社文庫 4050

ぼくは盲導犬チャンピイ

河相　洌

偕成社文庫
4050

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

もくじ

はじめに……9
誕生、そして別れ……11
若きご主人……17
わんぱく時代……22
むなしい努力……27
やきもち……34
未知の人を求めて……38
塩屋賢一先生……42

日本盲導犬史のあけぼの……50
愛犬学校の門……58
訓練開始……72
技を追って……82
にわかめくら……92
巣立ち……97
新しいくふう……109
訓練住境に入る……116
新しい経験……129
古き城の町……145
小事件……159

彦根盲学校……168
山中さん……180
チャンピイ通信……192
再会……203
道案内……215
くやしい体験……223
PRひとこま……233
雪の上の足あと……238
先生の不幸……245
フィラリアとの闘い……252
ゆくてをさえぎるもの……260

盲導犬大行進……271
終章……278
あとがき……283
解説……塩屋賢一……291

表紙装丁・辻村益朗

はじめに

「盲導犬ってなんだい？　どうもう犬の読みちがい、つまり番犬のことじゃないかね。」

これはぼくが、もう十年以上まえ、当時のＮＨＫテレビの人気番組、〈私の秘密〉に出演したとき、渡辺紳一郎なる先生がとばしたヨタである。渡辺紳一郎といえば、音に聞こえた物知りだが、こともあろうにその物知り博士さえも、盲導犬とはいったいどういう犬なのかごぞんじなかったのだ。

もっともこのごろでは多少なりとも、盲導犬について知られるようになってはきたが、それでも欧米の国々にくらべれば、とても問題にはならない。ぼくがご主人から聞いたところによれば、西洋では、古くローマ時代から、盲人が犬にひかれて歩いていたそうだ。とはいえ、そのころは盲導犬といっても、特別の訓練をうけた犬ではなく、ぼくたち犬族のもつ特性の一部を、ごく自然のままに利用したにすぎない。それが第一次世界大戦後、戦傷で目の見えなくなった人たちを、なんとかして社会に復帰させる一手段として、盲導犬の訓練が真剣にとりあげられたのだそうだ。そしていまではアメリカには約一万二千頭の盲導犬が働いている。盲導

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

犬発祥の地といわれるドイツでは、ある工場で百人余の盲人が、犬にみちびかれて職場に通っているそうだ。

ところが日本という国ではどうだろう。現在活動している仲間は、ぼくを含めてわずかに五頭。この一事を見ただけでも、ぼくたち盲導犬がいったいどんな能力をもち、いかなる仕事をするのか知っていただくことができないのも、当然のことといえるかもしれない。

そのうえ盲導犬を理解してもらうことのできない、もう一つの制約がある。欧米ではどの国でも、盲導犬は、汽車にもバスにも飛行機にも乗れる。ホテルはおろかレストランにまで自由に出入りができる。それだけに盲導犬の活動範囲は広く、人に接する機会もおおいので、しぜん理解も深まっていくわけだ。

それにくらべてぼくらはどうだろう。汽車には乗れない。バスもおことわり。旅館も食堂も、といったぐあいで、なにからなにまで締めだされるしまつだ。ただ足でかせげる範囲だけが、活動の場にすぎないのだ。ご主人がちょっと旅行をしたいと思っても、ぼくは箱に入れられ、荷物列車へと、べつべつの不自由な旅をしなければならないのだ。こういうわけで、盲導犬が理解される機会もきわめてすくなく、この小さな島国では、目の見える人が生きるのにせいいっぱい、ご主人のような見えない人は、わきへよって小さくなっていなければならないのだ。

生まれてこのかた、大好きなご主人のために、骨身をおしまず働いてきたぼくも、ことしで十二歳になった。十二歳といえば、人間の世界ではすでに齢八十に手がとどこうかという黄昏時だ。ぼくとても、けっしてさきが長いというわけでもない。つい目の見えないご主人に同情するあまり、ひがごとをならべてみたが、よくよく考えてみれば、これも気持ちのせまい話だ。それよりも、ぼくが生きてきた十二年の足跡をふりかえってみて、ぼくがどうやって世に送りだされ、きょうの日まで、一人の目の見えない人に、どれだけお役にたったかを聞いていただくほうが、よほどりこうなことではなかろうか。

誕生、そして別れ

昭和三十年四月八日、東京、青山にあるアメリカ大使館付海軍武官、ウイリアム＝C＝ノーベル大佐の公邸は、いつになくにぎわっていた。それというのも、ぼくをはじめ五頭の兄弟たちが生まれおちたばかりだったからだ。

ぼくたちのお母さん、ローレライがノーベル夫人のベッドでぼくたちを生みおとしたのである。そのときお母さんは四歳、アメリカで生まれたジャーマン・シェパードで、ノーベル夫妻

が日本駐在にきまるとともに、海を渡ってこの国へやってきたのだ。
お父さんは当時、日本の〈犬界〉に勇名を馳せていたビオルフ＝ピアステンダムというシェパードのチャンピオン。こうしてぼくの血のなかには、未来のチャンピオンたる素質をじゅうぶんうけついでいたわけである。
誕生後まもなく、ぼくたちはそれぞれりっぱな名前をちょうだいした。ぼくの名はチャンピイ。未来のチャンピオンにと、期待をこめてつけられた名前だ。
ノーベル家における毎日は、じつに楽しく快適なものだった。お母さんのおっぱいをはなれてからのぼくたちの食事といえば、ボール一ぱいのミルク、ひき肉のおだんご、それにパンといった豪華さであった。これを一日三回じゅうぶんにいただいたあとは、なにをしようとおかまいなしだ。
兄弟のなかではぼくがいちばんわんぱくで、すばしっこかった。すきをうかがって、台所へしのびこみ、ごちそう探しをよくやったものだ。あとの連中は、ただぼくの尻についてまわって、ワイワイいっているにすぎない。ぼくをかわいがってくれたメイドのFさんは自慢げに、奥様にこんなことを話していた。
「チャンピイはほんとうにりこうですよ。わたしのすきをみて、キッチンにもぐりこむのがと

てもじょうずなんですからね。その要領のよさは、わたしもおこれなくなってしまうくらい、あざやかなものでございますよ。」

すると奥様も、

「しようがないチャンピイね、わるいくせがつかなければいいけれど……」

と、これがくせの舌打ちをしながらも、いっこうにおこるふうもなく、Fさんの話を楽しげに聞いていた。

こうして太平の毎日がすぎていき、そろそろ夏を思わす六月となった。生まれてから三か月あまり、ぼくたちのからだつきも目だってりっぱになってきた。とくにぼくは兄弟のなかでも、いちばんのびのびと成長し、日ならずしてお母さんに追いつくかと思われるほど、みごとな体格を誇るようになった。

ある日、弟分のブラッキイがきゅうに姿を消した。おかしいなあ、まさか逃げだしたわけでもあるまいし、と思っていると、Fさんと運転手のHさんが台所のすみで、こんなことを話しているのが聞こえた。

「ブラッキイもとうとう行ってしまったね。しあわせになればいいが……」

「先方は大使館のかただそうだから、まずまちがいはないと思うけれど、でもうちのご主人や

奥様のようなわけにいくかしら……」

やはり、ブラッキイはだれかにもらわれていったのだ。でもぼくは、ノーベル家の人たちとけっしてはなれることはないはずだ。大佐も奥様もぼくを将来、アメリカへつれて帰り、競技会へ出場させるとおっしゃっていた。だから、名前もチャンピイとつけられたのだ。だが、ひょっとすると、ぼくもプラノキイと同じ運命をたどるかもしれない……。

その不安が、ある日現実となってあらわれた。

「チャンピーィ。」

客間のテラスから、奥様がからだ半分のぞかせて、ぼくを呼んでいる。庭で遊んでいたぼくは、なにごとかと、ひととびに庭を横ぎって、奥様の足もとにすっとんでいった。

「おはいり。」

奥様は客間にぼくを招き入れ、部屋のひとすみにすわらせた。

そこには、いままで見たことのない人が二人いた。一人はずんぐりした老紳士、もう一人はやせて背の高い青年、顔はよく似ているから、きっと親子なのだろう。

「これがチャンピイです。ボーイ、これからはあなたの犬として、かわいがってください。」

奥様は、この見知らぬお客さまにぼくをひきあわせると、ぼくの頭をなでながら、いいふく

めるように、こうおっしゃった。

「チャンピイ、これからこのかたがおまえのご主人だよ。この若いかたは、目がお見えにならないのです。おまえは一生懸命勉強して、きのどくなかたの道案内ができるようなりっぱな犬になっておくれ、おまえにとってこの仕事は、競技会にでるよりも、ずっとだいじな仕事なんですよ。」

ぼくの生きる道が、きゅうに新しい方向にかわったのには、つぎのようないきさつがあった。

先週のこと、ノーベル大佐は、アメリカ大使館主催のあるパーティーに出席された。たまたま、そこで、きょうここにあらわれた老紳士と席を同じくしたのである。話がはずんで、おたがいの家庭のことにおよんだとき、大佐は、この紳士が、家庭に一つの不幸をかかえていることを知らされた。

紳士は五人の子どもに恵まれているが、いちばん下の男の子が失明しているというのだ。大佐は、失明の原因が間接的に戦争にあること、それに、その青年が不幸に負けずに大学での勉強をつづけていると知って、深く同情してしまった。そのとき、ふと大佐の頭にうかんだのが、アメリカでよく見かけた盲導犬のことである。

本国にいたころ、街頭で、バスのなかで、あるいは地下鉄の車内で、犬にひかれてなに不自

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb